



Data

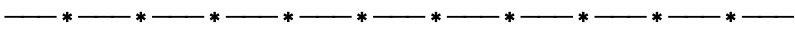
監督・脚本：河瀬直美
出演：村上虹郎／吉永淳／杉本哲太
／松田美由紀／渡辺真起子
／村上淳／榊英雄／常田富士男

👁️👁️ みどころ

何かとカンヌ国際映画祭に縁が深い河瀬直美監督が、「カメラドール、グランプリの次はパルムドール！」と意気込んで出品した本作は？

自分のルーツが奄美大島にあることを知った河瀬監督は、奄美に伝わる「ユタ神様」伝説を軸とし、16歳の若い男女の性の芽生えに焦点をあてながら、独自の死生観を展開！スクリーン上に描き出される美しい奄美の海と風を見れば、奄美では生と死の境界があいまいなことがよくわかる。

そんな河瀬流の発信の狙いと結果は、さて・・・？



■河瀬直美監督とカンヌ国際映画祭■

『萌の朱雀』（97年）でカンヌ国際映画祭カメラドール（新人監督賞）を史上最年少で受賞し、『沙羅双樹』（03年）でコンペティション部門に選出され、『殞の森』（07年）でグランプリ（審査員特別賞）を受賞したことからわかるように河瀬直美監督は、カンヌ国際映画祭と縁が深い。さらに、2013年には審査員を務め、今年5月14日から開催された第67回カンヌ国際映画祭のコンペティション部門には、本作が出品された。私が本作の試写を観たのは、カンヌで上映されたのとはほぼ同じ時期だ。

既にシネフォндаシオン部門（学生部門）では、日本の平柳敦子監督の『Oh Lucy!』が第2位になったが、さて河瀬監督の本作の結果は？

■独特の死生観は、理屈っぽく難解なことを前提に■

私は『殞の森』をDVDで観たが、正直言って、それは理屈っぽくかつ難解。しかし、

河瀬監督のテーマとする死生観は理屈っぽく難解なのは当然。奄美大島を舞台とし、高1の界人（村上虹郎）とその同級生でガールフレンド(?)の杏子（吉永淳）を主人公にした青春モノ(?)の本作でも、テーマは同じだ。しかも、数年前に自分のルーツが奄美大島にあることを知った河瀬監督が、養母、祖母、実母と共に訪れた奄美大島のホテルでは、皆で入った温泉の洗い場で養母、祖母、実母の三人が背中を流し合っている姿を見て、つながりがここにあるという、「得も言われぬ感情」が湧きあがったらしい。

そんな河瀬監督が自ら「最高傑作」と呼ぶ本作では、杏子の母親イサ（松田美由紀）は島の人たちの心の拠りどころになっている「ユタ神様」だ。さらに、奄美大島では生と死の境界があいまいで、そこをつなげているのは自然という「神」の存在らしい。したがって、イサは今病を抱え死期を迎えようとしているが、その肉体は消えても、イサの想いはそのまま娘の杏子の中に引き継がれるらしい。こんな風に、本作は河瀬監督作品らしく(?)理屈っぽく小難しいことを前提として、鑑賞したい。

■美しい海とミステリー色は、あの映画そっくりだが■

本作は、河瀬監督が撮影監督として起用した山崎裕のカメラがとらえる美しい奄美大島の海と自然の風景が特徴。しかし、冒頭に映し出される海の風景は、なぜか暗く陰湿だ。そんな中、海に立つ界人が見つけた死体の背中には刺青が彫られていたが、これは一体ダレ?他方、本作では事件の発生によって学校から遊泳禁止とされたにもかかわらず、なぜか制服のまま海中に潜る杏子の姿が登場し、亀爺（常田富士男）と語り合う印象的なシーンが登場する。さらに、本作のラストには、素っ裸の杏子と界人が2人仲よく海中を遊泳する美しいシーンが登場する。

本作に見るこんな特徴的なシーンを観て私が思い出したのは、福山雅治が主演した『真夏の方程式』（13年）（『シネマルーム31』228頁参照）。これは、東野圭吾の原作ミステリーの映画化だけに、冒頭、海の上に浮かんだ男の死体の解明がストーリーの軸になっていたが、他方で、杏が日本人離れた肢体で玻璃ヶ浦の海の中を潜るシーンが印象的だった。玻璃ヶ浦と奄美大島、場所こそ違え、美しい海を守らなければならないとか、海の中にはきっと神様が住んでいるという価値観は共通するものだ。

そんな点では本作と『真夏の方程式』はよく似ているが、本作は決してミステリー映画ではなく、冒頭の死体の登場は河瀬監督が本作のテーマとした死生観を描くためのネタの1つ。杏子は父・徹（杉本哲太）と母・イサのもとで幸せに暮らしているが、界人の母・岬（渡辺真起子）は離婚し、父親の篤（村上淳）は東京暮らし。そこで、岬は息子を養うため仕事に行かざるをえないが、そこには男のおいがプンプンしていたから界人にはそんな母親がやりきれないらしい。そのうえ、冒頭に見た死体の背中の刺青に界人はハッキリ見覚えがあったから大変。これでは、年頃の界人が母親不信、女不信に陥ったのはやむをえない。その結果、界人は杏子をガールフレンドとして、楽しく青春を過ごすことに大

きな抵抗感をもつ高校1年生に・・・。

■□■早見優に似た(?) 新人女優に注目! ■□■

界人を演じた村上虹郎は本作が映画初出演だが、歌手・U Aと俳優・村上淳の子供というから血統書つきのサラブレッド。前半は言葉少なく、杏子のリーダーシップに圧倒されていたが、母親・岬への怒りをぶちまけるクライマックスに向けてのシークエンスでは圧倒的な「攻撃力」を魅せてくれるので、それに注目!

他方、①導入部における、制服を着たままでの海中遊泳シーン、②死んでいく母親イサと静かに寄り添うシーン、③自ら界人にキスをしかけたり、「セックスしよう」と能動的に働きかけるシーン、等々において、次世代「ユタ神様」の最有力候補たる杏子の存在感は圧倒的だ。少し色黒できついまなざしの吉永淳を見て、私は奄美大島もしくは沖縄出身かと思ったが、意外にも彼女は大阪府出身で、既に何本かの映画にも出演している1993年生まれの子役女優。しかし、20歳前にして河瀬監督らと共にカンヌ国際映画祭に出席できるのは幸運という他ない。そんな、早見優に似た(?) 新人女優・吉永淳に注目!

■□■高1ではやっぱり女の方が早熟! そんな視点で! ■□■

男と女とでは精神的にも肉体的にも性の芽生えの時期がズレている。もちろん、女の方が早熟だが、高1という年頃の男の子は、自己の性的欲望と格闘することも多いはずだ。人間の生や性を見透すことにかけては百戦錬磨の河瀬監督だから、高校1年生の男の子・界人の性への欲求は十分心得たうえで、前半からずっと杏子からの積極的なモーションにもかかわらずそれに答えられない界人の姿を描いていく。制服で海の中を泳いだため、びしょ濡れになっている杏子の姿をみれば、それだけでついムラムラ・・・? 杏子の方からキスをしかけられたら、更に次の行為に・・・? さらに、「セックスしよう」とハッキリ言われたら、もう矢も盾もたまらず・・・? それが高1の男の子の正常な性的欲求の姿だが、なぜか界人はそれに答えられないばかりか「ダメなんだ・・・」と力なく発言するから、アレ・・・。去る4月30日に80歳で亡くなった、作家・渡辺淳一の最後の小説『愛ふたたび』では、性的不能となった老小説家が主人公だったが、まさか高校1年生の界人がそんなはずはない。さて、界人はなぜ杏子の積極性に答えられないの・・・? その秘密が本作後半に少しずつ解き明かされていくから、それに注目!

界人の母親・岬と父・篤の離婚の理由は詳しくは語られないから、それは界人がわざわざ飛行機に乗って東京に住む篤の元を訪れ、「男同士の会話」を交わすシーンから想像するしかない。しかし、界人がモンモンと母親に対して抱いている不信任感はさてホンモノ? それとも・・・。母親・岬の、高1になった男の子の扱い方には父親がいないこともあって少し疑問がある。少なくとも、母親の「女としての部分」に嫌悪感を抱いている高1の男の子の潔癖性くらいは理解してほしいものだ。それを理解すれば、杏子からのキスに戸惑いながら悩み、イライラし、その気持ちの捌け口を誰にもぶつけることができない界人

を、自分の胸に抱きしめようとするような行動はとれないはずだ。さて、あなたは思う？

河瀬監督自身、離婚を経験し、再婚後の04年に長男を出産しているが、息子はまだ10歳だから、高1になった男の子の扱い方はひょっとして十分わからないのかもしれない。いずれにしても、高1の年代では、すべてにおいて女の方が早熟。したがって、本作ではやはり杏子のリードぶりから、河瀬監督の死生観を読み解きたい。



『2つ目の窓』 7月26日(土)テアトル梅田他全国順次ロードショー
©2014 "FUTATSUNE NO MADO" JFP, CDC, ARTE FC, LM.

■□■奄美民謡や風の流れは、カンヌ向け！■□■

太平洋戦争直後のアメリカが持つ日本のイメージは、サムライ、ハラキリ、カミカゼの他、フジヤマ、ゲイシャガール等々だった。しかし、今やスシ、テンブラ、そして和食もアメリカはもちろん、世界に発信されている。「クールジャパン」による日本のアニメやファッション等のコンテンツのアジアへの発信に政府は熱心だが、映画を通じたヨーロッパへの発信は、世界のキタノこと北野武監督や河瀬直美監督がその先駆者。ヨーロッパに対して、日本の何を、どのように発信するか？それは難しいテーマだが、北野監督は北野流に、河瀬監督は河瀬流にやっているから、立派なものだ。

しかして、本作で河瀬監督が見せる奄美民謡の数々や風の流れは、明らかにカンヌ国際映画祭を意識したもの。とりわけ、臨終の席に集まった島人たちがイサの要望に応じて奄

美民謡を歌うシーンは、まさに生と死の境界があいまいであることを端的に示してくれる。また、冒頭に見せる、山羊の首をカッターで切り、血を抜くシーンも私は思わず少し目を覆ったが、河瀬監督流の死生観を端的に示すものだ。そして、奄美を流れる風の流れは、まさに息絶えたイサがこの風に乗ってどこかに飛んでいくことを連想させてくれる。

沖縄民謡なら少しは知っているが奄美民謡を全く知らない私は、字幕を頼りにそれを理解するしかないが、それはカンヌ国際映画祭に結集した人たちも同じ。河瀬監督は今ドキの日本人の若者向けのわかりやすい映画ではなく、わかりにくくても、カンヌはもちろん、世界の人々が感じ取れる映画を日本から発信したかったに違いない。そういう意味では、本作は『殯の森』よりはずっとわかりやすく世界の人々に河瀬流の死生観を発信できたはずだが・・・。

■結果は残念！受賞なし！■

4月18日に都内で行われた記者会見で河瀬監督は「この映画に関わって下さった、出資者の皆さま、スタッフ、そして俳優たちに支えられて出来たこの作品は世界一です。カメラドール、グランプリの次は、パルムドール。1つの形ある賞として、そこを目指すしかないと思っています」と語っていた。しかし、5月26日の朝刊で報じられたところでは、本作品はパルムドールはもちろん、グランプリ（第二席）も監督賞も審査員賞も脚本賞も、さらに男優賞、女優賞にも該当せず無冠に！反省としては、やっぱり私にもわかりにくい奄美民謡は外国人にはやっぱりわからなかったうえ、河瀬流の「死生観」はやっぱり難しすぎ・・・？

ちなみに、5月27日付日経新聞夕刊によれば、その評価は割れ、ルモンド紙は「生と死の間の泳ぎはパルムドールに値する」と絶賛したが、フィガロ紙は「哲学的な思想をはばかることなく表現したセリフは時々もったいぶったようになる」と辛口だったそうだ。さて、あなたはどちらに賛成？

2014（平成26）年5月26日記